

---

# らいふ いす りぼ～ん

GETTER

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

らいふ いず りぼん

### 【ZPDF】

Z9504C

### 【作者名】

GETTER

### 【あらすじ】

本編『Life Is Reborn』の番外編集です。本編では語られなかつたギャグ中心の話を、とくどくご覧あれ。

## 第1話【勝負ってのは、いつも真剣にやらないとな】

【SIDE・俺】

「ここの時を待っていたアル」

「ちつ、俺は別に待ってねえけどな」

ここは麻帆良学園のある広場。そこで俺は勝負大好きの中中国娘、古菲と対峙していた。

周りには観客が大勢おり、古菲を応援している者もいれば俺を応援している者もいる。

そもそも何故こんな事になつたのかと言つと……話は数時間前に遡る。

〈数時間前〉

「剣山ーッ！！」

「あつ？ 何の用だよ」

退屈な授業の1時間がようやく終わつたので、俺は次の授業に向けての気分転換に、廊下をブラブラしようと思つていた。

すると突然、大声出しながら俺の方へ走ってきた古菲が、俺の胸ぐらを掴んだ。

テメツ、こきなり胸ぐら掴むなんて何を考えてやがる！？

「いつになつたら私との勝負を受けてくれるアルか～！」

「あああああ……」

大声をあげて俺の首をガクガクと揺らし始めた。

脳みそがまるで勢いよくショイクされる感じがした……。

「俺の頭をパーにする気か！？　だから前に言つてあるだろッ！　暇が無いって！…」

「いつつも暇が無い、暇が無いって……そのパターンはもう飽きた  
アルよ」

「ぐつ……」

パターンつて……俺つてそんなに言つてたっけ？

だが俺は急激に増えた同居人の世話があるから古菲の勝負には付き合つてやれないのだ。

まあ、前の勝負の約束もコイツが一方的に取り付けただけだから俺  
が付き合つてやる道理は無い。

「ともかくー！　俺はお前の勝負事に付き合つ時間は……」

「まあまあ、そつ言わずに古の頼みを聞いてあげてほしいでござります  
よ」

俺が言おうとしたのを防ぎ、長瀬が乱入。

大親友である長瀬の協力もあって古菲の顔には笑顔が浮かんでもやが  
る。

そんなにコイツは俺と勝負をしたいのかよ……。

「そうよ。前々から古ちゃんが一生懸命頼んでるんだから、頼み事

の一つくらい聞いてあげなさいよ

ついに神楽坂も乱入しやがった。そう言えばコイツ等つて3-Aの中で特に成績が悪い『バカレンジャー』とか言う仲間だったな（ちなみに佐々木と綾瀬もバカレンジャー）。

やはり同類は同類を庇うのだろうか……。

「アスナも楓もありがとうアル。やっぱり同じバカレンジャー仲間である私を放つてはおけないアルか？」

長瀬は「二ン二ン」と真意が読めず、神楽坂は「そういう理由じゃないわよーー」と激しく否定。やっぱり俺、コイツ等の事はいまいちよく分からねえ。

「で、どうするアルか？」

三人のバカレンジャーが俺に迫ってくる。妙な威圧感も感じるのは気のせいか？

ハツ、俺つてトコトン不幸だぜ……。

「分かつた分かつた。受けよ、その勝負を受けりやいいんだろ！」

どうも俺は迫られると弱いと言つか、女は苦手と言つか、最終的には折れてしまう。

精神修行も近い日にやるべきだろつか。

「受けてくれて嬉しいアル。日時と場所はどこにあるね？」

「今日の放課後だ。場所は近くにある広場で良いだろ。そこなら広いし、戦いやすい」

古菲が「了解アル。いや～放課後が楽しみネ」と言い、教室を出て行つた。

そして俺は脱力し、溜め息をつきながらせつかく立つた席にすぐ着いた。

「古はなかなかの使い手でござる。油断は禁物の、手強い相手でござるよ」

「けつ！ 俺があんな勝負大好き娘に負けるかつてんだ」

負けない自信はあるのだが、実際に古菲が戦つている所を俺は見た事が無い。

“ちゅう”“けんぽー”とか言つのを使ひらしいが、どんな強さなのかは未知数だ。

だが、勝負を挑まれたからには男であろうと女であろうと全力で行かせてもらうまでだ。

それが男の、1人の戦士としての礼儀つてもんだ。

「うんうん。拙者もこの勝負、見物させてもらひでござるな」

「マジか……？」

そして冒頭に至る訳だが……これだけ周りに観客が居るとやりづらいな。

今まで俺が体験してきた戦いつてもんは、こんな感じじや無かつた

訳だし。

「頑張れーーー！ 菲部長ーーー！」

「そんな奴なんか簡単に負かしちまえーーー！」

くそー……野次馬が、好き放題言いやがつて。

あいつらを勝負が終わつた後でぶん殴つてやろうか？

それだつたら顔を覚えておかなくちゃいけないな。

「「ファイトーーー！ ケンブーンーーー！」」

「応援してゐるやうやるよ。剣山殿

俺の後ろからは聞き慣れた声であるチビ双子姉妹と長瀬だ。

人混みの中をよく見ると、Aの奴等が結構いるなあ。まったく、

お祭り好きな奴等だぜ。

「さて、始めるアル。お互い良い勝負をするアルよ」

「良い勝負になるか分からぬが……ともかく、せつとどやるか」

俺の言葉と同時に古菲が構えた。変な構えだが、あまりスキが見あたらねえな。

人間は時々本当に面白い事をやりやがる。

対する俺は構えなんか無いに等しい。

戦場じやあんな構えなんかしていたら真つ先に狙われるのがオチだ。

「ハツーーー！」

古菲が掛け声共に素早い動きで俺の正面に立ち、顔面目掛けて肘で打つ。

俺はそれを両手で受け止め、顔面に直撃するのを防いだ。

「こきなり顔面狙いとは大胆だな。これも“ちゅうじくけんぱー”とか言う物の教えか?」

俺は問うたが、古菲は無言で次の攻撃にと掘まれていない腕で仕掛けってきた。

だが、甘い。

これも俺は軽々と受け止めた。

これでお互いの両手が使えなくなつた。

「押されてばかりじゃ情けないんでな。反撃させてもいいぢや……!..」

俺は掘んでいた古菲の両手を離し、回し蹴りで攻撃を仕掛けた。回し蹴りは古菲の顔面を捉えていたが、古菲はそれを両手で受け止めた。常人なら反応出来ず、喰らつている所だが、流石はけんぽーの使い手だけある。

「くつ……氣も使ってないのにこの蹴りの威力は反則アル」

「受け止めたのは素直に褒めてやるぜ。喰らつてたら、顔の形が変わつてるぞ」

氣……か。

そういうえば前にタ「じじいや高畑に氣について教えて貰つた事があつたな。

教えてもらつたのは良いが、さつぱり理解出来なかつたけど。

しかも今では全部忘れてるからよけいに訳が分からないしな……！威張ることでもねえけど。

「私もやるアルよーー！」

受け止めていた足をはらい、連打を打ち込んでくる古菲。

周りから見たら田にも止まらぬ速さの攻撃だが、俺にとっちゃ生ぬるい。

全て避けるか手ではらい除ける。

「ホラホラビうした？ それじゃあ俺に一撃も喰らわせられないぞ」「くつー！」

この手の接近戦パターンはコンボいやライノックスとの模擬戦やシミュレーター、数々の実戦でマスター済み。つまり、避けるのは造作も無い事なのだ。

「のまま一気に決めてやるか。

そう思つた俺は若干のスキが見える脇腹に狙いを定め、攻撃の準備をする。

避けながら確実にタイミングを待つ。

「ヤツーー！」

今だな。

古菲が正拳を打ち入れる際に出来た僅かなスキ。それを見逃すほど俺は甘くない。

古菲の正拳を受け流し、俺は脇腹に素早く、的確に手刀を打ち込む。

手刀を選んだのは正拳よりかはダメージが少ないと思つたからだ（あくまで俺の勘だが……）。

「させないアル！！」

そう言つと古菲は脇腹寸前まで迫つていた俺の手刀をはらつた。いけね……思わぬ反撃に注意が逸れちました。

「ヤアー！！」

俺の腹部に強い衝撃が走つた。注意を逸らし、スキを見せた俺に古菲が正拳を打ち込んだ。

しかも威力は今までとはケタが違つた。この正拳に全てを掛けたかの様な威力だつた。

結構な衝撃に俺はその場に立ちつくす。吹つ飛ばされはしなかつたが、一点に凝縮された力つて奴はかなり厄介だ。

しかし、打たれ強い俺にとつてはこのぐらの衝撃は何10秒か経てば回復する。

動かない俺に勝利を確信してそうな古菲には、とても悪いがな。

「今のは……良い攻撃だった。だが、俺を倒すには全然足りねえ」

俺が言葉を発したのに酷く驚いている様子の古菲。俺は体制を立て直し、一気に詰め寄る。

正面まで迫つた所で古菲の頭を思いきり掴み、地面に押し倒した。周りから悲鳴に似た声があがる。やかましい事この上ないぜ。

「俺の勝ち、だな？」

掴んでいた頭から手を離し、体全体に体重を掛けて四肢の動きを奪う。

元々俺と古菲の体格差は倍以上なので抑えられたら身動きはまず取れない。

最初は何とか逃げだそうともがいていた古菲だったが、諦めたのか、抵抗を止めた。

「まいったアル。私の完全な負けネ」

屈託のない笑顔で言いやがるなコイツは。古菲の敗北宣言により、勝負は終了。

野次馬は負けた古菲に激励の言葉を贈りながら去つていった。所でよ、何で勝者の俺には一言も無いんだ？

「いやいや。剣山は本当に強いアルな。どうすればあんなに強くて、あんなに打たれ強くなるアル？」

「日々の特訓を積み重ねりや、誰でもなれる。……女がなれるかどうか分からぬけど」

強くなる為には特訓は欠かせない。

しかし俺の打たれ強さを身に付けるには……1回TFになれば身に付くぞ、古菲よ。

「負けてしまったが、ダイノにはまた勝負を挑みたいネ

「なら今日よりもっと強くなつてから挑んでこい」

頬を膨らませながら「解つてるアルよー」と言つ古菲に俺は思わず笑つてしまつ。

「イツの顔つて、意外に面白い。」

「お疲れ様でござる。2人共」

「なかなかの勝負だつたな」

長瀬と龍宮がタオルとドリンクを俺と古菲に渡してくれた。正直ありがたい差し入れだ。

長瀬が見ているのは知っていたが、龍宮まで見ているとは思わなかつた。

俺が渡されたタオルで頭を拭いてると古菲がドリンクを落とした。

見ると両手が微妙に震えている。

「手が痛いのか？」

「少し痛いだけアル。気にしないで良い」

平気そうに手を振っているが、かなり辛そうだ。

恐らく原因は俺の蹴りを受け止めた時だろ。

勝負に夢中で気付いてやれなかつたが、痛めていたのか。

「ふむ、骨は折れていないようだが、医者に診てもらつた方が良いかもしれないな」

「まずは保健室に行って手当してござる。拙者が運んであげるでござるよ」

長瀬が古菲を背負おうとしたが、こうなつたのは俺に責任があると思つて止めさせた。

持つていたタオルを肩に掛け、俺は古菲を持ち上げた。

「け、け、け、剣山！？」

「何だよ？ あまりジタバタ暴れるな」

俺が持ち上げた体制は前に早乙女に“おとことしてのたしなみ”として教えられた物だ。

名前は確か……“おひめさまだつ”だつたか？ 妙な名前だつたのでよく覚えている。

「ほれ、行くぞ。『タタタ暴れるな

「りよ、了解アル……」

顔を真っ赤にして頷く古菲。腕のケガの他に熱も出たのか？ それと何で長瀬と龍宮は固まつたままなんだ？

……ん？ 動き始めたが、目に殺意みたいな物が宿つてないか？ ここには敵も何もないぞ。オーケイ、オーケイ。

## 第2話【蜘蛛男、いじ登場】

### 【SIDE・エヴァンジョン】

今頃修学旅行に行つた連中は何をしてるのだろうか。

私はこの身に掛かる呪いのせいで修学旅行には行くことができない。  
だが、剣山が京都・奈良の土産を買ってきてくれると言つてくれた。

それを楽しみにして、連中が帰つてくるのを待つとしよう。

「まつたぐ。あのじじい……調べ物をしている最中に呼び出しあつて」

私は今、じじいに急に呼ばれて学園長室に向かつている。  
当然、私の後ろには、従者である茶々丸が付いてきている。  
剣山から預けられたミコウヒジャガーは私の家で留守番。

「じじい！　来てやつたぞ。一体何だ？」

「おお、待つておつたぞ！」

相変わらず人外の姿をしてるじじいだ。

ドアを乱暴に開けて部屋に入り、私は近くにあつた椅子に座つた。

「実は麻帆良大学の工学部にな、新しく研究員が入る事になつたの  
じゃ。各先生方にも了解は取つてあるし、ワシも彼と話し済みじゃ  
「それがどうした？　新しく入れるなら勝手に入れろ。私には関係  
ない」

そう斬り捨てるど、じじいは鬚を撫でながら、苦笑した顔で口を開いた。

「それがちと気がかりでの。その研究員からは、剣山君やミコウ君と同じ力を感じるんじやよ

私は一瞬自分の耳を疑つた。

剣山やミコウと同じ力を持つた奴がまだいると言うのか。

「……それでそいつは今何処に居るんだ?」

「もうすぐこの部屋に来ると思つんじやが……」

ふむ……一体どんな奴なのだろう。

工学部に入るくらいだから、葉加瀬達と同じくマッシュサイエンティストの類か?

それとも、まつたくと言つて良いほど全然違つか……。

「……ツ! マスター、熱源反応がこちりこ近づいてきます」

「何だと?」

学園内で熱源反応……もしかして例の新しい研究員か?

「……段々と、音がこちりに近づいてきまや」

「不気味じゃ……」

何か、飛行機が離陸するような音がこちりに向かって近づいてくる。……つて、校内で飛行機の音がすること事態がおかしい。

「うわっ! ?」

「こんにちわッ……わわっ!」

部屋の扉を突き破つて入ってきたのは、変な乗り物に乗つた男だつた。

しかもブレー キが利かなかつたのか、壁に激突してめり込んでいる。

あえて言わせてもらおう、変人だ。100%変人だ。

「だ、大丈夫かね？（汗）」

「ご、ご心配は無用ッス。ちょっとカスリ傷が出来ただけッスから」

あの激突でカスリ傷だけとは……剣山とミュウと同じ力を持つているだけあつて、あまり普通の奴じやないな。

それにこの趣味の悪い乗り物……ますます普通じやない。

「何だこの変な乗り物は。貴様が作つたのか？」

「そつツスよ。自転車をベースにバイクエンジンや、その他もろもろの機械を取り付けて速度を上げてみたんスけど、大失敗だつたッスね」

工学部に入るくせに、頭が悪すぎではないだろうか。  
普通自転車にバイクのエンジンは積まないだろう。  
この男……葉加瀬達とは少し違つた同類かもしけん。

「コホン。それでは君、改めて自己紹介をしてくれんか？」

「はいはい。アチシは麻帆良大学工学部に新しく入る事になつた多良・スミスと言う者ッス。以後、よろしくお願ひするッスよ」

多良・スミスと名乗つた男は、間近で見ると、ますます変人だつた。特に服の上に纏つて いる継ぎ接ぎだらけでヨレヨレになつて いる白衣は、ほぼ全身にポケットが付いていて異様だつた。

また、瞳の色も緑色なので、一層異様さが増している。

「この男に会っている生物は……例えるなら蜘蛛かもしね。

『マスター、この人からも……』

『ああ、剣山やミコウと同じ力を感じる。じじいの言った通りだな』

「おっ！ 珍しい人型ロボットス。本当に人間みたいス。名前は何と言つだス？」

突如目を光らせた多良は、茶々丸にすり足で近寄り、舐めるように観察した。

おい、あまり汚い目で茶々丸を観察するな。

「か、絡繰茶々丸と言こます」

「絡繰茶々丸ツスか。ほお～ほお～……」

「あ、あの……」

まさか茶々丸がこんな変態男に押されるとは。

まあ確かにこの男、見た目はかなりインパクトが強い。

茶々丸が押されるのも無理はないかもしね。

幼い子供が見たら泣くぞ、きっと。ぼーやなんか夜眠れないかもしだ。

れん。

「ふむふむ……見れば見るほど素晴らしいツスね。是非、開発者と一度会つてみたいツス」

「は、はあ……」

何か、葉加瀬達と会わせてしまつたらMS同盟マックス・アライアンスが誕生してしまいます。

うだな。

それこそ、世界がひっくり返つてしまいそうで不安だ。

「おい、あの男を工学部に入れるのは止めた方が良いんじゃないかな？」

「しかしのぉ……彼の技術力はかなりの物じやし、野放しにしておくのは勿体ないんじや。高い能力を生かすために、ここで働いて貢つた方が無難じやろ。それに剣山君とミユウ君と同じ力を持つているなら、もしかしたら知り合いかもしれん」

じじいの言つている事は一理あるが……この男、本当に大丈夫なのだろうか。

「さてエヴァンジエリン。彼を工学部にある生活部屋と研究部屋にまで案内してやつてくれんかの。部屋番号は「これじや

「何だと？ 他の奴等にやらせれば良いだろ？が！」

「生憎この時間帯はどの先生も暇が無いんじや。道案内を宜しく頼むぞ。フォフォフォ」

くそつ！？ じじいめ……。

夜には背中に気を付けておけよ。

「おい、貴様を今から部屋に案内するから付いてこい。それと一手に持つてるチーンソは何だ！ 茶々丸をどうする気だ！？」

「いやいや……別に何も」

油断もスキもありやしない。

明らかに茶々丸を分解する気満々だつたな、アイツは。

「茶々丸、今後、あの変態にあまり1人で近づくなよ  
「はい、マスター」

一応茶々丸にも注意深く念を押しておぐ。

分解なんかされたらたまつたものではないからな。  
わて、わつわとじじいからの用件を済ませるか。

「工学部の方に行くぞ。早く来い」

「はいはい。でもちょっと待ってくれッス」

多良があの変な乗り物を持ち上げたかと思いつと、白衣のポケットにそれを押し込んだ。

ドンドンとポケットに収納されていく姿を見て、私、茶々丸、じじいが睡然とした。

「よしー、じゃあ行くとするッスよ」

「ちょっと待てーー！ そのポケットはどんな仕組みになつてるんだーー？」

物理法則と言う物を貴様は知つているのか！？

未だに呆然としている茶々丸、じじいを放つておいて、私が代表で先程の事態を訊いた。

私が静かに体を震わせていると、多良が不適にフツと微笑んだ。

「それは……大人の事情ッス。ウヒヤヒヤヒヤヒヤー。」

氣味悪い笑い声を放ちながら多良は部屋を出て行つた。  
私は再び睡然となつた。

「何なんだ……あいつは……」

私達が正気に戻つたのはそれから数分経つた後だつた。  
ああ……変な奴が来たもんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9504c/>

---

らいふ いづ りぼ～ん

2010年10月28日13時54分発行